（様式１－表）　　令和6年度　特色ある学校づくり推進事業　計画書

学校番号	112	豊田市立　竜神中　学校	代表　緒方　秀充

※分野【a：国際交流・国際理解、b：地域連携、c：自然体験、d：環境教育、e：学力向上、f：交流体験、g：福祉・ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ、h：伝統文化、iその他（　）】から選ぶ。

テーマ	自律　・・　貢献	分野	i	その他
	サブテーマ　心ふるえる ふるわせる時を重ねて一竜人になる！	i(その他）は分野を右欄に記入	キャリア教育	

学校づくりの視点（ねらい）

⑴ ねらい
問題探究力を育成する。
基礎的・汎用的能力のうち、それぞれ、本事業で重点的に高めたい力として、次のような具体的な４つの能力を目指す。

○ 人間関係形成・社会形成能力
○ 自己理解・自己管理能力
○ 課題対応能力
○ キャリアプランニング能力

⑵ 方策
○ 全教科で探究のプロセスに基づく問題発見・解決型の授業を実施する。
○ 総合的な学習の時間を生かし、生き方や夢を考えるキャリア教育を実施する。

活動内容・計画

９月　２年生　職場体験学習
　　３年生　修学旅行（ＳＤＧｓの視点で貢献を考える）
１１月　１年生　キャリアチャレンジディ
　　（職業人や地域人材の講話から社会で必要な能力や意志を考えるプロジェクト）の実施
　　２年生　専門職の方による生き方や働き方に関する講義
　　３年生　社会貢献を意識したキャリアプランニングに関する講義
１２月　３年生　地域の方や保護者による面接練習
１月　３年生　地域の方や保護者による面接練習
２月　１年生　入学説明会における新一年生を迎える会
　　２年生　自然教室立志式（生き方を考え、決心する）
３月　１年生　職業レディネステスト
　　３年生　卒業式（自律・・貢献を体現）

（通年）　全教科で　①課題の設定　→　②情報の収集　→　③整理・分析　→　④まとめ・表現　を取り入れ、
　　探究型の授業を実施する。

補助員配置

校内整備員

実績・期待される効果

課題発見・解決能力の育成
○ 人間関係形成 ・社会形成能力
　他者の個性を理解する力、コミュニケーション能力、チームワーク力の向上
○ 自己理解 ・自己管理能力
　自己の役割を理解し前向きに考える力、忍耐力、主体的な行動力
○ 課題対応能力
　情報を主体的に選択する力、本質を理解し課題を発見する力、計画を立案し実行する力
○ キャリアプランニング能力
　学ぶこと ・働くことの意義を理解し将来を設計する力、自分を向上させるためのスキルを選択し行動する力

検証方法

・各活動において、生徒が振り返る場面を設定し、それらをキャリアパスポート化することで、個人の生き方についての学びの変容がわかるようにする。
・地域学校共働本部を中心に、地域や保護者にこれらの取組について紹介し、理解を促すとともに、地域の人材を活用した授業づくりを積極的に工夫する。
・保護者アンケートを活用して、生徒や保護者のキャリア教育に関する考えの変容や実態を把握する。

様式３

令和６年度特色ある学校づくり推進事業報告書

学校番号（１１２）　学校名　　豊田市立竜神中学校

１　テーマ

自律　・　・　貢献

～心ふるえる　ふるわせる時間を重ねて一竜人になる！～

２　ねらい

(1)　基礎的・汎用的能力のうち、それぞれ、本事業で重点的に高めたい力として、次のような具体的な４つの能力を目指す。

○人間関係形成・社会形成能力　　○自己理解・自己管理能力

○課題対応能力　　○キャリアプランニング能力

(2)　心の相談員や校内環境整備員の配置により、悩みを抱えた生徒への早期対応や、安全で潤いのある環境づくりをすることで、心豊かな生徒を育む。

３　活動内容

(1)　キャリアプランニング能力等の育成

１年生

１１月　職業人や地域人材の講話から社会で必要な能力や意志を考えるプロジェクト（キャリアチャレンジデイ）

１月　小学校児童への部活動紹介等

３月　職業レディネステスト

２年生

９月　社会人マナー講座

９月　職場体験学習

３年生

１２月　地域の方や保護者による面接練習

１月　地域の方や保護者による面接練習

(2)　悩みを抱えた生徒への早期対応や、安全で潤いのある環境づくり

年間４回、「学校生活アンケート」を実施し、アンケート調査結果を分析している。その分析をもとに、必要に応じて心の相談員やＳＣやＳＳＷを招いて「いじめ対策委員会」「不登校対策員会」を開催し、問題を抱える生徒一人一人について丁寧に話し合う。

4　成果と課題

⑴　キャリアプランニング能力の育成

＜１年生＞

【警察官の話を聞く生徒】

本年度で６回目となる「キャリアチャレンジデイ」を実施した。本年度も５０名を超える様々な業種の地域の方々を学校にお招きし、職業観ややりがいを聴いたり、職業に対する素朴な疑問を尋ねたりする活動を行った。生徒からは、「どの仕事にもやりがいや、大変さがあることが分かった」「どの方も笑顔いっぱいに話してくださって、夢をもつ大切さを感じた」「どんな仕事に就こうか、夢をもって進んでいきたい」などの声が聞かれた。

こうした活動における地域講師との連絡、案内状配布などは地域学校共働本部と連携して行い、学年の教師と役割を分担することで、業務内容の精選にも努めている。講師からの事後アンケートには、「本当にすばらしい活動だから毎年楽しみにしている」「生徒たちの真剣な表情が見られてとてもよかった」など、たいへん好意的な意見が多く寄せられた。

＜２年生＞

【社会人としてのマナーを学ぶ生徒】

「職場体験学習」を９月中旬に実施した。今年度については、「社会人マナー講座」を事前に実施したことで、社会人として必要となるマナーだけでなく、生徒たちは「受け入れてくれた職場に貢献できる３日間にしたい」「中学生の職場体験ではなく、社会人０年目の意識をもって参加したい」という気構えをもつことができた。

また、職場体験学習では、自分の夢や将来をしっかり見つめながら、勤労の価値や働き甲斐について知るよい機会となった。協力してくれた職場からは好意的な意見が多く、地域連携の視点からも、本校にとって貴重な資源となっている。

＜３年生＞

３年生を対象にして、本年度も地域の方や保護者の協力による「面接練習会」を開催した。これは、ボランティアを募り、受験前で面接を控えている３年生と一対一の個別で面接練習をするものである。昨年度は１０名であったが、本年度は昨年からの継続参加者を含め、２１名の協力者にご参加いただいた。練習を終えた３年生からは、「面接がある学校とない学校があり、学級での練習が限られてしまう。初対面の方と面接をすることで、すごく緊張したけど、当日

は落ち着いて試験に臨めそう」という感想があった。また、ボランティアの保護者からは「来年は自分の子どもも受験生なので、面接練習の相手をしてあげられる」という声があった。

⑵　悩みを抱えた生徒への早期対応や、安全で潤いのある環境づくり

①　学校生活アンケートによる実態把握

定期的ないじめ調査、相談情報の収集、全校生徒の意識調査などの目的で、年４回のアンケートを行っている。実施時期に合わせて質問内容を変え、生徒の心の変化・学校行事などに伴う人間関係の変化などを探ることで、より適切に生徒の変化を把握できるよう努めている。またアンケート結果は、いじめ対策委員会で共有し、学年・学校で生徒の状態を見守るようにしている。

②　教育相談による早期発見、早期対応

学校生活アンケートをもとに、年４回の教育相談週間を設け担任が学級の全生徒と個別に面接できる時間を確保している。裁量時間や短縮日課によって１回に約２００分程度の時間を確保することで、確実に全員と面談するとともに、生徒の思いや悩みに丁寧に耳を傾けることができ、早い段階で問題の芽を摘むことができている。ここで得た生徒の情報はデータで共有し、全職員が把握できるようにしている。

③　いじめ対策委員会・竜中生を語る会の開催

年間４回、教育相談週間の結果と、相談主任の記録を資料として、現状の問題点や今後の対応策について、いじめ対策委員会において共通理解を図っている。この会は、本校のＳＣやＳＳＷにも参加していただいており、専門的な見地からのご意見・ご指導をいただく場ともなっている。

また、毎月いじめなどに対し迅速かつ丁寧に教職員全体で対応できるよう、竜中生を語る会を行っている。いじめの問題だけでなく、不登校・不登校傾向の生徒も含めて、共通理解を図り、学級・学年以外の教員からも適切な声かけができるよう努め、全職員で見守ることができる体制づくりに努めている。

④　スクールカウンセラーの活用

ＳＣは、本年度２名の配置があり、生徒・保護者とのカウンセリングに力を入れている。ＳＣのカウンセリング予定表を常設し、学級担任・学年主任が連携して予約を記入することで、面接を希望する生徒を速やかにＳＣへつなぐよう努めている。また、定期的に面接を希望する生徒・保護者にも対応する体制をとっている。

⑤　保護者や教職員へのアンケートの実施

毎月の職員会議において、教職員にもアンケートを実施している。担任だけでなく、教科担任から見た生徒たちの小さな変化を共有することができ、いじめ及び不登校の防止に役立っている。

また、保護者向けの教育相談アンケートを年に２回実施し、家庭・地域から見た本校生徒の様子を調査した。全体として、「あいさつがとても良くていい」とい

う声をいただいた。一方で、生徒の様子の変化を訴えた声は計６２件あがり、個別懇談会で話題にして対応した。

⑶　いじめ、不登校児童生徒への相談体制の強化・不登校児童生徒の社会的自立の支援

①　竜の子ルームの充実

本年度の教育相談の方針を「不登校を問題行動と考えず、個に応じた学びの場としてのあり方を引き続き模索していく」「進路を見据えて長期的な支援に努める」とし、年度当初に不登校生徒に対応する取組について全教員で情報共有した。

本校では、在籍する学級に入れない、また学級に入りにくくなった生徒が活動場所として利用する竜の子ルームを設置している。今年度は正規教員を竜の子マネージャーとして配置し、教育相談主任と協力して運用をしている。竜の子ルームには、いつでも必ず誰か教員が対応でき、安心して学校に足を向けられるようにと考え、竜の子の１コマを教員の持ち時間表に組み込むことで、教員が常駐するしくみを整えている。学級と同様、生徒ごとに個別の机・イスを用意することで、在籍する学級に入れない生徒の心の居場所として有効に機能している。

【用途に応じたスペースの活用】

今年度から、利用生徒たちは、竜の子マネージャーと朝の会や学活を行うことで他者との関わりをもったり、落ち着きのある生活リズムの中で過ごしたりできるようにした。また、利用生徒は毎朝、一日の目標やスケジュールを立て、目的意識を間仕切りを活用してそれぞれが目的に。

②　心の相談員の活用

週に２回程度、心の相談員が竜の子ルームを基盤として、学校に馴染めない生徒の相談に乗っている。教員以外の大人が生徒に寄り添うことで、生徒が学校や教員に心を開くきっかけとなることも多い。本年度、竜の子ルームを利用して卒業した生徒が高校生活の様子の報告に来校した。また、その際に利用生徒に自身の来校した。長期にわたって生徒の心に寄り添う関わりのできる心の相談員との交流は、登校に対して前向きにするだけでなく、学校や社会に馴染めなかった生徒にとって社会的な自立の一助となっている。

⑷　「特色ある学校づくり推進事業」に校内整備員を配置したことによる成果

校内整備員の配置により、以下のような校舎内外の環境が整い、心地よい学習環境を提供できている。

・本年度も、特に生徒による清掃活動が行き届かない部分の整備に取り組み、学習環境を整えることができた。
・庭園内の伐採等により、教室から気持ちのよい風景が見られるようになった。

・不登校傾向生徒の指導にも関わる校務主任の仕事を補助し、校舎内の老朽化に対応する修繕や害虫の駆除等に取り組み、生徒が安全に学習することができた。

5　保護者・地域への情報発信の取組実績

・ホームページを毎日更新し、その中で各学年のキャリアプランニング能力育成への取組をなども紹介した。

・月１回の学年だよりで各学年の取組を紹介した。

様式４

令和６年度特色ある学校づくり推進事業報告書
【国際交流・都市と山間教育交流】※どちらかを○で囲む

学校番号（１１２）　学校名　豊田市立竜神中学校

１　テーマ
ＩＣＴ機器（Ｚｏｏｍ）を活用し、外国人と英会話を楽しむ生徒の育成

２　ねらい
ＩＣＴ機器を活用し、外国人とコミュニケーションをする機会を増やすことで、英語学習への意欲・関心を高め、実践的な英語でのコミュニケーション能力を高める。そして、外国人と英語で交流することを楽しめる生徒を育成したい。

３　活動内容
５月　生徒募集　　海外の文化との比較
６月　ダービーシャー現地校との打ち合わせ　交流準備
９月　交流準備・練習
１０月　ダービーシャーとの国際交流
１０月　交流事後のまとめ
２月　Belper School の生徒受け入れ　国際交流

４　成果と課題
学習指導要領では、英語を「聞くこと」「読むこと」「話すこと（やり取り）」「話すこと（発表）」「書くこと」の４技能５領域をバランスよく育成し、その４技能を相互に関連付けて活用できるコミュニケーションの場を設定することが大切であるとされている。とりわけ、社会のグローバル化が加速度的に進む現在、英語教育に求められているのは、英語を「使う」能力の育成であると考える。

そのためには、文法中心の学習から脱却し、即興的コミュニケーション能力の向上を目指した、授業の創造がより一層求められている。

そのような中、英語科担当の教員によって、なるべく英語を使って授業を行ったり、生徒同士で会話を多く行ったりといった努力をしている。しかし、授業の中では表現が限定されてしまうことも多い。また、ALT と一対一で会話する場を設定しているが、事前に対話練習をしているにもかかわらず、いざ話すとなると、上手く自分の言いたいことを表現できない生徒も見られる。そのため、「英語を話すこと（やり取り・発表）」の技能を育成し、相手の話している内容を理解し、それに対して瞬時に答えられる力を身につけさせたい。

そこで、昨年度に引き続き、国際まちづくり推進課とタイアップし、イギリスのダービーシャーとの交流（Ｚｏｏｍを利用したオンライン交流）を計画した。ＧＩＧＡスクール構想により、学習用タブレットが一人一台配付され、オンラインで対話をす

ることが容易になり、また、調べ学習がしやすくなったという利点を生かし、文化や言語について自分たちで調べることで主体的・対話的で深い学びにつなげた。

実際に交流したのは、ダービーシャーの Belper School である。同年代の海外の生徒たちとコミュニケーションをとる手段が英語のみという状況に置くことで、生徒の中で「英語が苦手だからどうしよう」ではなく、「何とか相手に英語で伝えたい」という積極的な気持ちを高められるようにした。

【オンライン交流のようす】

生徒は英単語や文法が間違っていたらどうしようかと心配し、話す原稿を英語で作成していたが、海外の生徒からの質問に対して簡単な英語で答えたり、単語を並べたりしてコミュニケーションを取ることができた。生徒からは、「自分が話した英語が伝わってよかった」「あとで考えると、文法が間違っていたと思うけど、話したら伝わったのですごい」といった感想や、「機会があったらまたやりたい」といった声が多く、「英語を話すこと」に対する苦手意識が解消された様子がうかがえた。

【授業交流のようす】

さらなる交流を図るため、来日した留学生１６名を２月２５日から２７日に受け入れた。それぞれの生徒を、１・２年生の全ての教室で受け入れ、交流できる体制とした。日常生活では、各教科担任が英訳資料を用意したり、お互いの文化や考え方を紹介したりする授業を展開した。その甲斐あって、お互いに活発な意見交流をしたり、学びを深めたりする機会となった。また、今年度は留学生の引率教諭が英語で授業を行う機会も設けたことで、教師にとっても短い期間ではあったが、別れの場面では互いに感極まって涙を禁じ得ない生徒たちの姿が見られた。交流後に本校生徒にとったアンケートからは、「主体的に留学生と会話することができた」「海外に対する興味関心が高まった」という結果が得られた。

次年度以降についても、積極的に海外留学生との交流を重ねることで、生徒たちのゆたかな国際感覚を醸成する素地を築いていきたい。

5　保護者・地域への情報発信の取組実績

・Ｚｏｏｍを利用した国際交流の様子を、ホームページで紹介。
・Belper School の生徒の受け入れのようすや、生徒との関わりをホームページで紹介。